2024年5月12日

説教題「愛し抜かれている『一人』」ヨハネによる福音書13章21～30節

主任牧師　加藤　誠

「イエスは、この世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」（ヨハネ福音書13章1節）。「ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った」（同27節）

キリスト教会以外の人にとっては、一番弟子のペトロよりも裏切者ユダの名前の方がよく知られているように思います。主イエスをその敵対者たちの手に引き渡したユダの罪は確かに重いものがありますが、しかし一番弟子ペトロも、それ以外の弟子たちも、主イエスを裏切ったことには変わりはありません。弟子として恥ずかしい、取り返しのつかない失敗をしたという意味では同じなのに、ユダだけが「裏切者」と呼ばれ続けていることには少し違和感を覚えざるを得ません。

古くからユダの裏切りを巡って多くの解釈がなされてきました。「他の多くの弟子がガリラヤ出身の中で、ユダだけは南部ユダヤ地方の出身であり、育った言葉も話す言葉も違い、彼は弟子集団の中で疎外感をずっと覚えていたのではないか」とか、「弟子の中で会計係を任されるくらいに頭のよかったユダだから、漁師のペトロたちとは普段から肌合いが悪かったのではないか」とか、「都エルサレムに上る直前にベタニア村でマリアが主イエスに非常に高価なナルドの香油を注いだ時に『なぜこんな無駄遣いをするのか』と非難したユダに、主イエスが『この女性がするままにさせなさい』とみんなの前でたしなめられたことに怒りを覚えたのではないか」とか、「ユダは主イエスが救い主としての働きをはっきりとあらわされることを期待して、そのきっかけを作るために売り渡したのではないか」などなど。

しかしながら、わたし自身は未だにどの解釈にも納得ができていません。わたしにはユダの裏切りの動機がどうしても分からないし、ユダの思いを早いうちから知っていたと思われる主イエスがユダをたしなめることなく、むしろ最後の最後には、裏切りを勧めるような言葉をかけておられるのを見ると、ますますわからなくなるのです。

そもそも、わたしはユダのことを根っからの悪人とは思えません。というのはユダは自分がした「罪」の大きさに打ちのめされ、深く後悔し、自分には生きる資格はないと自分で自分の罪に決着をつけようとしています。根っからの悪人なら、主イエスを裏切った後、開き直っていいわけです。裏切りの後、イエスとはっきり縁を切る生き方をしようと思えばできたはずなのに、ユダはそうしませんでした。彼は受け取った銀貨三十枚を神殿に投げ入れています。ユダは言葉を遺していませんが、「イエスさま、わたしは取り返しのつかないことをしてしまいました。ごめんなさい…」というユダの声が聞こえてきそうです。自死を選んだユダの中に、彼なりのイエスへの思い、イエスへの愛が残っていたのを感じざるを得ないのです。

今朝のヨハネ福音書の 13 章を読むと、ユダは最後の差後まで迷っていたように思います。「（イエスは）パン切れを浸して取り…ユダにお与えになった。ユダがパン切れ受け取るとサタンが彼の中に入った」（26－27 節）という箇所に胸が苦しくなります。主イエスの言動がユダを裏切りに突き動かしているように思えてならないからです。もし主イエスがパン切れをユダに渡さなかったら、サタンがユダオン心に入ることはなかったのではないか。というのも、この直前にユダも弟子の一人として主イエスに足を洗ってもらっているのです。自分の前に小さくひざまずいて、自分の汚れた足を丁寧に洗う主イエスを見ながら裏切りへの思いがさらに強まったとは、わたしにはどうしても理解できません。しかしながら「ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出ていった。夜であった」（30 節）とあります。それは、ユダが主イエスの愛を離れて、この世の悪の暗闇の中に自分の身を沈めた瞬間でした。

この時のユダの思いを思い巡らすときに、人が罪に落ちるのはほんの一瞬のことであると示されます。その一瞬で、人はそれまでの関係をすべて失ってしまうし、その瞬間を人間はコントロールできない、ほんとうに弱い者なのだと。そしてユダはこの時の気持ちをあとで説明しろ！…と言われても、たぶん言葉にはしきれないのではないかと思います。それはユダだけでなく、私たちもまた、自分の中に、明確な言葉にはできず、説明しきれないものを抱えている存在なのです。

私たちは、自分のことを分かっているようでいて、しかし言葉にできず説明しきれないものを抱えているように思います。主イエスの言葉と生き方に感銘を受けて「その通りだ」と思いながら、その通りに生きれない自分を抱えている。毎日いろいろな人との関係の中に、自分の中に生まれる感情、うごめくものをコントロールできる者になりたいと思うけれど、それはほんとうに難しいことなのです。わたしの中にユダを見るし、もし何か違ったとしても自分とユダとの違いは紙一重のことなのではないかと思うのです。そしてユダは、最後の晩餐の席で自分が抱えている「分からない、自分でも説明しきれないもの」に最後の最後まで悩んだのではないでしょうか。　・

このユダに関して一つ確実なこと。それは主イエスが最後まで「このうえなく愛し抜かれた」弟子の中に、ユダもいたということです（13 章 1 節）。ユダも他の十一人と同じように、その足を主イエスに洗っていただいた一人だったということです。主イエスは、このユダの罪のためにこそ十字架にかかられ、自分がしでかしてしまった罪に苦しみ、自分で自分を赦すことができず、自分を自分を裁いていったユダのためにこそ、主イエスは復活の命と希望をあらわしてくださったということです。

ペンテコステを前に、あらためて、自分のしていることの意味がわからないでいる私たち一人ひとりの前に小さくひざまづき、汚れた足を洗ってくださっている方の祈りを覚えたいのです。